

暁の大地  
6

成尾  
陽

目次

九、人生の目的◆ 7

愛善の心 ◆ 7

変わりゆく世の中 ◆ 17

子育て ◆ 26

自然破壊のツケ ◆ 36



この小説は、大本のみ教えをドラマ風に書き下ろしたもので、平成二十二年と二十三年の機関誌「おほもと」と、平成二十四年以降の機関誌「みろくのよ」に連載したもので、登場人物の多くは実在の人物ではありません。

暁の大地  
6



## 九、人生の目的

### 愛善の心

「おめでとうございます」

大地は実家の玄関のドアを開け、声を掛けた。

「いらつしやうい」

奥から明るい声がし、京子が小走りに現れた。

「ソウ君、よく来たね、おめでとう。寒かったでしょ」

大地の手をしっかりと握って、恥ずかしそうにはにかんでいるのは、二歳になった大

地の長男・蒼汰朗そうたろう、つまり京子の孫である。

「お母さん、あけましておめでとうございます」

「おめでとうございます、芳さんかおる。また降ってきたみたいね。さあ、上がって」

「はい、おじゃまします。少し積もりそうですね。蒼汰朗、長靴を脱いで」

芳の声で蒼汰朗は玄関に腰掛けて上手に長靴を脱ぎ、腹ばいになって靴を直した。

「お、たいしたものだ。偉いな蒼汰朗は」

遅れて出てきた大地の父・剛が、孫の頭をなでた。

「お父さん、おめでとうございます」

芳が笑顔であいさつした。

芳は雨宮家に嫁いで四回目の正月を迎えていた。大地と結婚したのが平成二十九年六月、一年後に蒼汰朗を授かった。令和三年の新年で二歳半になった蒼汰朗は、目がクリツとした端正な顔立ちで、ようやく片言の単語で会話らしいことができるようになりつつあった。かわいい盛りである。

「はい、おめでとうございます。それにしても芳さんの躰しっけがいいんだな、この年で靴をそろえられるとはね」

「いえ、気まぐれで、いつもできるわけじゃないですよ」

芳がうれしそうに言うと、蒼汰朗は立ち上がって京子の手をつかみ、催促するように奥へ向かって行った。

今年の正月は、雨宮家全員で顔をそろえることができず、新型コロナウイルスの影



響がここにも及んでいた。

師走に入り、第三波の感染拡大が広がり、東京で美容師として働く大地の妹・ちあきも両親を気遣い、長野への帰省を断念した。

「早く会いたいけん、今は帰らんでいいけんね」

帰省を迷っていたちあきは、このフレーズをテレビニュースで知り、温かみのある表現に共感し、正月休みは東京に残ることにしたのだった。

この言葉は、島根県の広聴広報課がゴールデンウィークに向け企画し、昨年四月末に山陰中央新報に掲載した新聞広告で、「第四十回新聞広告賞」に選ばれた出雲弁のコピーである。そこには「県外に住むあなたが大切だと想うひとに、どうかそんな言葉をかけて欲しい。そのひとを守るために今は会わないことにしませんか。…近いうちに、いつも通り会える日が必ず来ます」とメッセージが添えられていた。

「なるほどなあ、と思ったちあきは、父の「心配ない、大丈夫だから帰ってこいよ」とのLINEメッセージに、「高齢者一人のためだからね」と返信していた。

「高齢者って七十歳以上じゃないのか？俺はまだそんな年じゃないぞ」

剛は、ちあきが帰省しない理由を大地に愚痴った。

「まあ、お父さんも去年還暦で会社を定年になったし、もう孫もいるおじいさんだから、そろそろあらがわれないようにした方がいいかもね」

大地が言った。

「こんなかわいい孫がいるんだから、そうなんだろうけど、なんだかな」

「お父さんは認めたくないもんね。私はまだ還暦まで数年あるから、当然高齢者じゃないわよ。でも、蒼汰朗に『バアバ』って呼ばれるとうれしいけどね」

京子が笑いながら言った。

「まあまあ、新年早々、年の話ばかりじゃつまらないから…。さあ、乾杯しよう」  
剛が話を変えた。

「では、あらためて。新年、あけましておめでとうございます」

剛の発声に、それぞれが「おめでとございます」と唱和した。

「おめでと…」

蒼汰朗のはにかんだ声も聞こえ、笑いが起こった。

「すごい、おめでと…って言えるんだ」

大地の弟・司が驚いた様子で言った。

幼子が一人いるだけで、その場の雰囲気が大きく変わる。まさに天使のような存在である。主役の蒼汰朗を中心に、兩宮家の居間にはぎやかな新年会となった。

両親と弟、妻と長男。妹がこの席にいないのは残念だが、大地は家族六人が元気で新年を迎えられたことを、心からありがたいと感じ、おのずと笑顔になった。

「綾部のおじいちゃんとおばあちゃんも元気だったよ」

大地は今朝、祖父母の梅木松太郎とともに電話をし、新年のあいさつを交わしたことを報告した。

「あら、そう。私、まだ連絡してないわ。またあとで電話しないとね。」

「そういえば芳さん、亀岡の天恩郷は、麒麟きりんがくる」の大河効果で、参観者が増えて  
いるそうね」

「そうらしいですね。うちの両親も先月お参りに行ったようですが、ちょうど日曜日で、大勢の人でにぎわっていて、びっくりしていました」

芳が自身の実家を通しての情報を伝えた。

「コロナの影響で、放送が一時中断したけど、今回の大河ドラマはなかなか面白いな」  
剛が言った。

「その分、期間も延長するらしいね。確か二月七日まで延びるそうだよ。大河ドラマは放送が終了してからも、“大河ロス”とか言って、しばらくゆかりの地は観光客でにぎわうらしいね。だから、本能寺の変の起点になった亀山城址（じょうし）の大本は、これから春にかけて人が多くなるんじゃないかな」

大地は、光秀時代の石垣の一部が残る天恩郷の神苑風景を思い浮かべていた。

「叛逆者、謀反人と言われ続けた明智光秀が、今回は英雄のように描かれているのが斬新だね。十一月ごろの放送だったか、比叡山焼き討ちの前後、特に天台座主（ざいす）の覚怒（かくじよ）の悪役ぶりが秀逸だったな。それに今回の大河は、信長や正親町天皇（おとぎまち）、摂津晴門（せつづ）や松永久秀、最初のころだったら齋藤道三とか、脇役がそうそうたる顔ぶれで、見応えがあるよね」

「司は、やけに詳しいな」

大地が感心した。

「それにしても、天台座主（ざいす）や僧侶をあんなふう（ふう）に悪役で描かれたら、延暦寺の人たちは嫌だろうね。私、ちよつと心配しちゃうわ」

「そうだよね」

大地も同調した。

「俺も思ったな。ひよつとしたら、比叡山がNHKに抗議を入れるんじゃないかと心配になったね」

剛が相槌を打った。

「それが違うんだよ。何かの記事で読んだんだけど、天台宗の役員の人コメントが紹介されていてね。正確には憶えていないけど、大河ドラマの比叡山焼き討ちの描写に関しては、あくまでもドラマなので、比叡山としては「怨親平等」の思想から、いちいちコメントはしませんと書いてあったんだよね」

大地が説明した。

「おんしんびようどう?」

司が訊いた。

「怨親平等っていうのは、恨み敵対した者も、親しい味方も、分け隔てなく同じように扱うってことらしいね」

「なるほど、中東紛争のように、報復の連鎖はしないということか」

「それに比叡山延暦寺では毎年、信長による焼き討ちの犠牲者を供養する法要を行っ

ていて、その法要の鎮魂塚には信長の遺品も納めてあって、敵味方同じように追悼しているそうだよ」

「さすが天台宗だ、懐が深いな」

剛が頷きながら言った。

「もう一つ、感心したことがあってね」

大地は真面目な顔になった。

「毎年、延暦寺のお坊さんたちが托鉢をするでしょ」

「ああ、寒行托鉢だな」

「そうそれ、年末にお坊さんたちが比叡山から町へ下りて、寒い中を托鉢に歩いて、お布施を集めるんだよね。でね、去年はその浄財の一部を、NHKの歳末たすけあい

に寄付したそうだよ」

「えっ、NHKに……。やるね」

剛の声が大きくなった。

「でも、大本にも同じような考え方がありませんよね、お母さん」

芳が京子に言った。

「えっ、そう、そうね、あつたよね」

「確か、讚美歌の中にあつたな」

大地が助け舟を出した。

「責めらるる苦しき身にも虐ぐる

仇を愛する心たまはれ

「おんしんびよう 怨親平等どう っていう言葉聞いた時に、僕はこのお歌が浮かんできたなあ」

「あだ 仇を愛する心か…、なかなかできることじゃないけどな」

剛が腕を組んだ。

すると京子も思い出したように短歌を口ずさんだ。

「そっいえば、

にら 睨まれてにらみかへすは人ごころ

笑ふてかへすは神かみしんこう心なる

という聖師さまのお歌もあつたわ」

「そのお歌、ステキですよね」

「でも、自分がそんなふうにできるかどうかは別だけどね」

京子は芳と目を合わせてから、剛の方に目をやった。

剛は、笑って返されたらかえって怖いぞお……と言わんばかりに、肩をすくめた。

「見直し聞き直し……、大本も天台宗も、要は『愛善の心』だよ。お正月だし、めでたし、めでたし……、としようね」

「フツ、お兄ちゃん、うまくまとめたね」

司がちやかすように言った。



## 変わりゆく世の中

「そろそろ時間かな」

そう言って司がリビングを出て行き、程なくパソコンを持って戻ってきた。そのままテレビの前で何やら操作して、パソコンを設置した。

「では、今からオンライン新年会を始めます」

「おっ、ちあきが参加するのかな？」

大地が訊いた。

「そうそう。今、Zoomで招待しているから、しばらく待って」

「それにしても、去年のコロナ禍から急速にネットを使うことが増えたよな。司もリモートワークが増えたって？」

「そうなんだよ。うちの銀行でも出勤は二日に一回のペースになってきて、働き方も一変したね」

司は大学卒業後、長野市内の地方銀行に勤務。営業担当で、お客さまとの接し方に、苦慮しているという。

「リモートワークもいろいろ制約があるし、お客さんも年配の人が多から、ネット

だけに頼るわけにもいかず、何かと難しいね」

「司はいろいろ大変みたいね。でも、私は良いこともあったわよ。おかげで聖地での大祭や月次祭がライブ中継されて、自宅からお参りできるようになったしね。ありがたいわよ」

京子がうれしそうに言った。

「そうですよね、お母さん。ネットを通じてお参りできるようになるなんて、一年前までは考えてもいませんでした。土曜の夜の、新型コロナウイルス終息オンライン一斉祈願”も、全国の人たちと一緒にお参りできるようにになりましたしね」

「そうよね。私もスマホを通してご祈願させていただいているけど、あの一斉祈願には、何人くらい参加しているのかしらね？」

「年末に本部の知り合いに聞いたんですが、大体毎回、百アカウント前後らしいですね。でも昨年の最後、直心会が担当の時には、三百くらいになったそうですよ」

「え、さすが直心会だわ」

「お母さんも、ユーチューブやSNSができるようになったんだね？」

大地が訊いた。

「まあ、何とかお父さんに教えてもらいながらね。お父さんが、ユーチューブの大本公式チャンネルを登録してくれたしね」

「えっ、そうなの？」

大地が驚いたように言った。

「そんなに驚くことでもないだろう。まあ、成り行きでね」

京子の夫・剛は、大本信徒ではないものの、大本については理解を示していて、何かと京子に協力してくれている。確か暮れには二万を超えていたんじゃないかな

「チャンネル登録者も増えているよな。確か暮れには二万を超えていたんじゃないかな」

剛が言った。

「そうだよ。もう二万一千になっていたね。そのほとんど、二万人くらいが一般の人らしいよ」

「ほく、そりやすごいな。たいしたもんだ。確かにコンテンツの数もそこそこあるし、中身の質は高いと思うな」

「そうですね。特に聖師さま・出口王仁三郎のネームバリューは高いので、関連動

画から大本の映像を見にくる人が多いんですって。それと霊界、目に見えない世界のことについて知りたい人が増えているような感じですね」

芳かおるが答えた。

「こういう先の見えない時代だから、死後の世界に興味を持つ人が増えているんだろうな」

「そうだね。霊界を紹介した『この世の向こうに』というアニメは、一年前まではアクセス数一万くらいだったのに、コロナ禍で一気に増えて、もう八十二万回を超えているもんね」

大地は登録者数の急増に驚いていた。

「パソコンとかに疎うとい私の両親ですら、最近ではタブレットを使い始めて、ユーチューブの動画を見るようになったんですから、時代は進みましたね。それとLINEラインのビデオ通話で蒼汰朗そうたろうの様子が見られるのが楽しみですよ。必要に迫られると、人間できるものですね」

芳もネットを通じて両親に孫の姿を送れることがうれしく、こんな世の中にあって、新しい手段を使い、環境に順応することも神さまのお恵みだと感じていた。

「大本讃美歌の中のお歌に、今の私の心境にぴったりだなと思ったのがあったんですよ。」

変はりゆく世に生まれ来て皇神の

恵みにひたるは嬉しからずや

(大本讃美歌第一〇二)

というお歌なんです」

「本当に今は、変わりゆく世の中だね。でも、芳さんのように何事もプラスに捉えていけないとね」

「はー」

芳は京子に共感してもらい、うれしそうに返事した。

「おっ、お姉ちゃんが入ってきた」

司がパソコンを操作した。

「あけましておめでとうございます」

テレビ画面の向こうのちあきが笑顔であいさつした。

「おめでとうございます」

兩宮家の全員が、声を合わせるように応えた。

「みんな元気？ あ、芳さんお久しぶりです」

「お久しぶりです。ちあきちゃんも元気？」

「はい、めっちゃめちゃ元気。年末が忙しかったんで、今朝はゆっくり寝てました」

「お客さん、多かつたんだ？」

「コロナがはやりだしたころは、足が遠のいたけどね。でも、みんな髪は伸びるから、徐々に戻ってきたの。それに多くの常連さんは来てくださったんで、ありがたかったわ」

「そりゃ、良かったな」

剛が安心したように言った。

「ホント、美容室ってお客さんと密になるし、仕事が減るのかと心配していたからね。良かった、良かった」

京子もテレビ画面のちあきに向かって言った。

「確かにそうよね。寒い間はコロナも減りそうにないから、あったかくなったら帰ってらっしゃいね。みんなちあきにカットしてもらおうのを待っているから」

「そうだね、春になったら一度帰れるかな」

ネットを使つての画面越しでのやり取りだが、互いがそばにいるかのように、スムー

ズに会話ができる。しかもほとんど費用はかからない。便利な世の中になったものである。

蒼汰朗が興味深げにテレビに向かって歩み寄った。

「あつ、ソウタロウ」

ちあきが手を振った。

「ほら、ちあきおぼちゃんだよ」

「違う、チーねえちゃんだからね」

ちあきが、大地の呼び掛けに反論した。

「蒼汰朗、ほら」

芳が何かしゃべるように蒼汰朗に耳打ちすると、蒼汰朗は恥ずかしそうに小さな声で、おめでどう…と言った。

「うわ、すごい、もうしゃべれるんだ、おめでどうソウ君。アツ、そのトーマス気に入っ  
たかな？」

ちあきがクリスマスプレゼントで贈ったおもちゃの機関車を、蒼汰朗はしっかりと握りしめていた。

「すつごく気に入ったみたいで、毎日これで遊んでるのよ」

「ほんと、良かった。ありがとうね、ソウ君」

画面のちあきを含め、兩宮家全員での新年会はにぎやかに進み、話に花が咲いた。

「そうだ、大地たちも人型を書いておいてね」

「了解、また書いて持つてくるね」

大地が言った。

「お母さん、私の分は書いておいてね」

ちあきが画面から話し掛けてきた。

「あと、アパートと自転車もお願い。いつもなら人型に書いてから体を撫でるんだけど、今年は無理だね」

「その分、お母さんが真心込めてしっかり書かせてもらおうからね」

「お願いします」

二人の会話を聞いた芳が、あの…と京子に訊いた。

「人型で体を撫でるんですか？」

「いえ、別に撫でなくともいいんだけどね。今回のちあきのように代筆でもいいわ



けだから、必ずそうしなさいということじゃないのよ、芳さん」

「そうなんですネ」

「私は子供のころから、父に言われていたことを習慣でしていたものだから…」

「どんなふうによ？」

「人型に息を吹きかけて全身を撫でていたのよ。時には一晩、枕の下に敷いていたこともあったの。それをうちの子供たちが小さいころからさせていたので、一年に一回のことだけど習慣のようになっていたのね。特に頭は念入りに撫でて、賢くなりますように…つてね」

「そうなんですか、じゃあ、今年は私もそうしてみます。蒼汰朗にも」

「そうね、それがいいわね」

「でも、コロナ禍の今だからこそ、大祓はらいって大切ですね」

「本当にそうだと思うわ。疫病退散…、大難を小難に、小難を無難に…。節分にはしつかりお祓はらいしていただきましょうね」

「そうだ、芳は、人型用紙の中に書いてあるマークは何か分かるかな？」

大地が芳に質問した。

「あの象形文字のようなもの。そういえば、何かなと思ったことはあつたけど、意識してなかつたかも」

「あれはね、しゅうぼく修祓の二文字をつなげて書いてあるんだよ」

「へえ、そうなんだ」

二人の会話を耳にし、京子が近くに置いていた人型用紙を芳に手渡した。

「あつ、ホントだ。何となく分かる」

「芳さん、それ、私の受け売りよ」

「なんだ、そうなの」

芳の反応に、大地は苦笑いした。

## 子育て

「人型用紙の修祓しゅうばつ マークもそうだけど、人間って見慣れすぎてしまうと、気にも留めていないことって多いものだよ。同じように、当たり前前あたりまえのことが、本当は当たり前じゃない、ありがたいことなんだということを、つい忘れてしまっているなあ。今のコロナ禍で、みんながそのことを感じるようになったんじゃないかな」

剛がしみじみと言った。

「そうですね。本当なら、今ここにちあきちゃんがいるのが当たり前ですものね」

かおる  
芳が言った。

「そうそう、私もそう思う。いつもなら、そこでみんなとおせちを食べているはずだもん」  
画面の向こうからちあきが発言した。

「でもね、こんな状況だから、忘れていたことに気付かされることもあるのよね」

「えっ、何？」

「先月の二十日ごろだったかな、職場から帰る電車の中で高校生の男の子たちの会話が耳に入ってきたのよね。その子、いつもならお正月は離れて暮らすおじいちゃん、おばあちゃんのところに行くはずで、楽しみにしていたよね。もちろんお年玉をもらえるっ

てこともあるようだったけど。でも、今年はコロナで東京からは行けないって言うの」

「ちあきちゃんと同じね」

「で、その子偉いのよ。今まで書いたことなかったけど、今年初めておじいちゃん、おばあちゃん宛てに年賀状を書いたんだって。うちみたいにオンラインはできないから、せめて年賀状くらいはって。ね、イイ話でしょ。私、その会話を聞きながら、コロナでつらいことも多いけど、良いこともあるんだなって思ったわけ」

「へえ、孫から年賀状を受け取ったおじいさんとおばあさんは、今頃きつと喜んでるでしょうね」

芳がちあきの話に顔つなきながら応えた。

「そうだ、うちも届いているかな？」

おせち料理の里芋を頬張っていた司は、箸を置いて席を立ち、ほどなく戻ってきた。

「また雪が降ってきたよ」

そう言いながら司は年賀状の束を剛に渡した。

「お父さん、うちの年賀状は蒼汰朗せうたろうの写真だからね」

大地がすかさず言った。

「おっ、そうか、じゃあそれだけ見せてもらおうかな」

剛は年賀状をめくった。

「あつた、あつた。こりゃかわいいな、ほら」

剛は相好を崩しながら、京子に手渡した。

「あらホント、良い写真」

「かわいいね、蒼汰朗」

司が京子の手元をのぞき込んだ。

「私にも見せてよ」

画面のちあきがじれったそうに言った。

「はいはい」

司が年賀状を受け取り、パソコンのカメラに向けた。

「ホント、良い写真だね」

「ちあきにも送ったはずだよね、芳」

「はい、送りましたよ」

「たぶんまだ届いていないと思うから、楽しみ〜」

「ほら、誰だ？」

司が年賀状の写真を蒼汰朗に見せた。それが自分だと分かったのか、蒼汰朗は写真を指さして恥ずかしそうにした。そのしぐさが愛らしく、みんなの笑い声がリビングに広がった。終日、雨宮家には和やかな時が流れた。

三月、北アルプスの山々には雪が残り、平地の梅のつぼみもまだ堅い。それでも確かに春は近づいている。

大地は結婚後、実家から出て長野市内で芳との新居を持った。取りあえずアパートを借り、新婚生活をスタートした。

東川芳との最初の出会いは六年前、聖地での大道場修行だった。当時大地が二十八歳、芳が二十五歳。その時は、互いに相手を意識してはいなかったが、その後、大祭参拝などで聖地で会う機会が重なり、次第にお互いが気になる存在になっていった。

電話やLINEでの交流はもとより、長野と静岡というそう遠くない距離も幸いし、たびたび会う機会を作った。一年ほどの間に二人の仲は深まり、二年足らずでのゴールインとなった。

大本の信仰家庭で育った芳だったが、大地同様、青年部活動に積極的に参加していたわけでもなく、信徒籍もなかった。しかし、大道場修行での出会いであったことから、神さまがご縁を結んでくださったのだと感じていた。大地も同じ気持ちだった。

二人の間では、大本のことをはじめ共通の話題も多く、次第に互いの価値観が近いことを感じていた。何より一緒にいて心地よかった。

結婚を前に二人はそろって大本に入信し、天恩郷・万祥殿で華燭かしやくの典を挙げた。これには大地の母・京子、そして何より綾部の祖父母が大層喜んでくれた。

芳の両親、それに大地の祖父・松太郎の勧めもあって、自宅にはご神号幅を奉斎することになり、新婚生活のスタートとともに、信仰生活も始まった。

まずは、朝夕拝の励行。一日の始まりに二人そろって神さまに手を合わせて、夕食前に一日の感謝をささげる。大地は、自分一人だと長続きしないかも…と思ったが、芳と二人だと意外と続けられた。

しばらくするとニューフェイスが加わり、家族三人での楽しい日々が続いた。仕事で嫌なことがあっても、蒼汰朗の笑顔を見ると疲れも吹っ飛び、癒やされている自分があった。子供の力はスゴイ！と実感する。蒼汰朗のおかげで親となり、自身の両親に対する気持ちにも変化を感じるようになった。

芳は実家のある静岡で蒼汰朗を出産し、長野に帰ってからは、子育てに専念している。初体験で分らないことばかりだったが、何か悩みがあると京子に相談することがしばしばであった。

「子供が三歳までは、楽しいことばかりよ」

ある時、京子は『寸葉集』を手に、三代教主さまのお示しを紹介してくれた。

母（二代教主）は、こんなことを言っていました。

「わたしは子どもに孝行などしてもらおうとも思うとりません。子どもの小さい時に、子どもを育てることで充分楽しませてもらいましたので」と。

乳児が知恵づきつつ成長してゆく課程の愛らしさ、そして大人になってゆく美しさ、おもしろさを、母は大きな愛情をもってよく見、よく味わいつつ、苦しみもまた楽しみとして育ててきたことだけで充ち足りていたのでしょう。

母のこの言葉のもつ深い含蓄と、ただならぬ偉大さに頭のさがる思いがいたします。

「芳さん、今はしっかり子育てを楽しむのよ。小さいうちはね、ちょうど子供に、楽し



みや喜び」という借金をしているようなものだからね。子供が大きくなるにつれて何らかの苦勞は必ずあると思うけど、その時は、その借金を返済していると思えばいいのよ。それに時々、ボーナスもあるしね。私にとって、あなたたちの結婚は大きなボーナスだったわ」

芳は京子のアドバイスに助けられ、気持ちが悪くなったこともたびたびであった。

♪ピンポン

インターホンのチャイムが鳴った。蒼汰朗が反応して、真っ先に玄関へ向かってちょこちょこ走った。

「蒼汰朗、誰かな？」

後から付いて来た芳が玄関のドアを開けた。

「やー、蒼汰朗、こんにちは」

蒼汰朗は素早く芳の後ろへ回り、芳の陰から司の顔をじっと見た。

「あら、恥ずかしいの。ほら、司おじさんよ」

「だから、芳姉さん、おじさんじゃなくて、司兄さんと教え込まないとダメだよ。でも、マスクしているから分からないかな」

司は、おじさんと呼ばれることに妙に抵抗していた。

「これ、野沢菜」

「ありがとう、うれしい」

京子から頼まれて、司が自家製の野沢菜漬けを届けに来たのだった。

「で、これは…」

とポケットから小さな車のおもちゃを取り出し、しゃがんで蒼汰朗の目の前に差し出した。蒼汰朗は急に笑顔になり、車をつかんだ。

「あら、もらったらどうするの」

蒼汰朗はニコニコしながら、小さく頭を下げた。そのしぐさがかわいく、司は蒼汰朗の頭をなでた。

「どうぞ、上がって」

「はい、お邪魔します」

司が奥へ進んだ。

「司、いらっしやい」

大地が顔を出した。

「野沢菜を届けていただいたの」

「そっか、ありがとう。ま、どうぞ」

大地がリビングに誘い入れた。

「ここへ来たの、半年ぶりかな？」

司がコートを脱ぎながら言った。部屋にはコーヒーの香ばしい香りが立ち込めている。

「えっ、そんなになるかな」

「去年の秋以来だと思っよ」

「コロナで会う機会も少なくなったからな」

「それもあるよね」

二人は芳が入れたコーヒーを飲みながら、兄弟で近況を語り合った。すぐそばでは蒼汰朗がお気に入り機の関車のおもちやと、さつきもらった車で楽しそうに遊んでいる。

「そうそう、夕べね、すごく面白いというか、興味深い映画を見たんだけど、お兄ちゃんは何知ってるかな？」

「ん、何ていう映画？」

大地が訝しげに訊いた。

## 自然破壊のツケ

「『コンテイジョン』というアメリカ映画なんだけどね」

「コンテイジョン？」

大地が司に聞き返した。

「まるで今の新型コロナウィルスの感染拡大を予言したような映画で、しかも十年前に制作されているんだ」

「へえ、そんな映画があつたのか。もう一昔前になるけど、日本にも国内で未知のウイルスがまん延したストーリーの『感染列島』という映画があつたな。確か英語版のタイトルが『パンデミック』。僕も半年くらい前にネット動画で見て、今のコロナ禍を思わせる現実味があつて、びつくりしたことがあつただけどね」

「それ、僕も見ただよ」

「なんだ、そうか」

「でも、コンテイジョンは、もっとリアルに今の世界の感染の様子を連想させる…と  
いうか、そのまんまという印象なんだよ。マット・デイモンが主演で、ジュード・ロ  
ウや大勢のハリウッドスターが出演していてね。新種のウイルス感染が目を追って世

界中に拡大していく恐怖が、とにかく現実味を帯びて伝わってくるんだ。日本での感染の場面もあつて見応えあつたよ」

司が真剣な表情で話を続けた。

「司、タイトルの“コンテイジョン”の意味は？」

大地がコーヒーを飲みながら訊いた。

「確か、伝染」

「そうか、面白そうだな。僕も見てみようか」

「見ておいて損はない、お薦めの映画だよ。当初アメリカでは、せつかく豪華なスターを集めたのに地味すぎる」とか「単調で飽きた」となんていうレビューも多かったようだけど、今は大注目されて、「リアリティーがありすぎて怖くなった」という評判で、僕も見ていて怖いくらいだったよ」

司が顔をしかめた。

「この手のハリウッド映画にありがちなアクションやラブシーンはないんだけど、ストーリーがよく考えられていて、パンデミックの二日目から、淡々と時系列に追って

いるんだ。この二日目から始まるのがミソでね。日を追って、いくつかの視点で感染の進行状況を描いているんだ」

「その一つに日本でのシーンもあるわけだな」

「そうそう、日本では路線バスの中で感染者が発症するという想定だったね。実際の新型コロナウイルスよりもかなり速い感染スピードだけどね」

「そうなのか」

「映画の最初は、マット・デイモンの奥さんが感染して死んでしまい、追い打ちをかけるように小学生の息子も亡くなってしまふ。でも、父親と娘にはたまたま免疫があったのか、感染しないんだよ。それとか、患者の対応に追われる医師が感染したり、防護服を着た作業員がゴーストタウン化した市街地を消毒するシーン、無人の量販店で品物を略奪する暴徒化した住民なんかの場面は、去年世界のあちこちで報道された光景と同じだ…と思ったな」

司が詳しく映画の内容を語った。

「あら、二人とも真剣な顔ね」

芳かおるがお茶とお菓子かおるを運んできた。

「面白い映画の話ですよ」

「ちよつと聞こえていたけど、なんだか怖そうね」

「ホラー映画じゃないですよ、でも違う意味で怖いんです」

「私、怖いの手」

「芳は怖がりだから見なくていいよ」

「あら、大地君は見るつもりなの」

「たぶん……」

大地が小声で言った。

「じゃあ、一緒に見よつかな」

そう言いながら芳は、お茶とお菓子を司の前に置いた。皿に盛られた三色団子を目ざとく見つけた蒼汰朗そうたろうが、おもちゃを置いて近づいて来た。

「これはダメよ。蒼汰朗は、こつちね」

芳が小さく切ったバナナをテーブルに置くと、蒼汰朗はすかさず口に頬張った。

「ん、このお茶は、えんめい茶かな？」

司が湯飲みを持ったまま訊きいた。

「さすが、司君。よく分かつたわね」

芳が感心して言った。

「これ山野草のお茶で、カフェインが入ってないから、蒼汰朗にもいいよね」

「そうなの。お母さんから教えてもらって、蒼汰朗も時々飲んでるのよ」

「そうだったんだ」

司は、出された三色団子の串を持ち、一つかじった。

「ねえ司君、三色団子は『飽きない団子』だって知ってる？」

芳が訊いた。

「飽きない、ですか？ いや知らないです。おいしくって飽きないっていうことですか？」

「ハズレ」

「え〜」

「どうしてか、知りたい？」

「はい」

「芳、じらすなあ…」

大地が笑いながら言った。



「実はこの団子の色が由来なのよ」

芳が団子を指さした。

「色？」

「このピンクは桜色で春を表し、白は雪で冬を表すんだって。で、緑色は新緑で夏。ということはない？」

「春・夏・冬か、ということは、秋がないですね」

「そう、秋がないから…」

司が頭をひねった。

「そっか、秋がない」から、あき・ない、飽きない」ですか」

「正解！」

「なんだ、ダジャレじゃないですか」

「まあ、そんなところね。でも、飽きないは商売の「商い」にもつながるから、それこそ縁起が良いのかもね」

それを聞いて大地が話に割り込んできた。

「ついでに言うと、入り口に、春夏冬中<sup>なか</sup>という札を出している店があるんだけど、これはどういう意味でしょう？」

司が腕を組み、しばらくして答えた。

「分かった、秋なかない中だから、商ちゆうい中」

「ご名答。営業中ってことだな」

「なるほど、勉強になりました。では、冬と夏を頂こうかな」

司は団子を食べ終わって、映画の続きを話し始めた。

「コンティジョンでは、感染の恐怖と戦う難しさ、偽情報によるパニック、都市封鎖、医療崩壊、ワクチンの入手争いといった場面が続くんだ。グローバル化で世界が狭くなったことも伝わってきたよ。この映画を見てから今の世の中を見ると、現実がまるで映画の続編かと思えるくらいなんだ」

「なるほどね。グローバル化の流れは止まらないよな。二十年ほど前にSARSがアジアやカナダを中心に感染拡大したけど、幸いにも日本には入ってこなかった。MERSもヨーロッパでは広がったけど、日本は大丈夫だったんだ。でもそれ以降、世界は急速にグローバル化が進んで、今は国境を越えるのもアツと言う間で、今回の新型コロナウイルスは瞬く間に、全世界に広がったわけだからな」

大地が真剣な表情で言った。

「そうだね。それにしてもこの映画を十年も前に制作していたことに驚いたな。当時、なぜ日本であまり話題にならなかったのかと思ったら、日本は東日本大震災の渦中だったからみたいだね」

そう言って司はしばらく考えてから、話を続けた。

「どうしようか、映画のラストは、これから見るお兄ちゃんには言わない方がいいかな？」

司がわざと独り言のように言った。

「いいよ、ここまで詳しく解説してくれているし、どうせしゃべりたいんだろ。僕もいつ見られるか分からないしね」

大地が見透かしたように言った。

「バレた？」

司は、じゃあとやってお茶で口を潤した。

「憎いのが映画のラストなんだ。ストーリーがパンデミックの二日目から始まっているって言ったでしょ。で、最後に感染の一日目、パンデミックの原因が映し出されるんだ」

「なるほど」

「感染の始まりは武漢じゃなくて、香港っていう設定なんだけど、ウイルスの由来は、なんとコウモリで、家畜の豚にウイルスが運ばれ、その豚を通して人間に感染するという起源だったんだ。でもね、そのシーンを見て、『エッ、こんなことから』って思ったんだ。日常のささいな出来事が、ウイルスの発生源なのかと思うと、正直ゾツとしたな」

「へえ、そうなのか。確か、『感染列島』も似たような想定じゃなかったかな。南洋のどこかのジャングルのコウモリだったような気がするな。結局、人間が経済優先で森林を伐採し続けていったツケが回ってきたということだよ。経済繁栄の裏側では、大きな犠牲が払われている」

「そうだね、二つの映画の内容は、人間のエゴや欲望、自然破壊への警鐘ということだね。でも、僕ら自身の問題でもあるな」

天井を見上げながら、司は自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

「大本の聖師さまは、

大三災小三災の頻発も

人のこころの反映なりけり

というお歌を詠んでおられるんだけど、僕は最初、あまりピンと来なかつたんだ。でも、今回のコロナ禍で理解できるようになった気がする。感染症は小三災の飢病・戦の病に当たるだろ。自然破壊も経済優先も、利便性や金品を求める人間の心にあると思うと、このお歌の意味がストンとおなかに入つた気がしたんだ」

「確かに、そういうことだね」

司が同調した。

「人類の行き過ぎた開発が、自然の奥に潜んでいたウイルスとの接点を生んで、それが今のコロナ危機につながつたのかもしれないなあ。だから、今のうちに過ちに気付いて、根本的な反省に立たないと、この子らの未来が心配になってくるよ」

大地は、傍らで無邪気に遊ぶ蒼汰朗に目をやった。

(続く)